

後世必ず清を知らむ

〜東・南シナ海波高し〜



宮下 亮善

『尖閣諸島(沖縄県石垣市)周辺の領海外側にある接続水域で十七日、中国海警局の船4隻が航行しているのを海上保安庁の巡視船が確認した。尖閣周辺で中国当局の船が確認されるのは一二四日連続。第十一管区海上保安本部(那覇)によると、一隻は機関砲のようなものを搭載。領海に近づかないよう巡視船が警告した。』

八月十八日掲載の新聞情報である。

歴史にifもしあの時こうであったなら、その後の歴史は変わったものであったろうと思われる。時々の時代の事象を捕らえて表現

されがちのものであるが、あの時、西郷隆盛が朝鮮の大院君に会い明治新政府と和解が成立したならば、その後の歴史はどのようなものになっていたかというifである。著者の見立てでは『征韓論Ⅱ遣韓論』は終焉してはいない。寧ろ現在進行中の問題であると。

『独り、事情に適せず、豈、歓笑の声を聴かんや羞を雪ぎて戦略を論じ義を忘れて和平を唱ふ秦檜遺類多く武公再生難し正邪今邦ぞ定まらんや後世必ず清を知らむ』

自分一人だけ時勢に合わず、意見が用いられなかった。どうして反対派の人々の歓び笑う声に耳を傾けておれようか、いや、聴くにたえない。武公岳飛が金に進攻された宗国の恥じをそそぐ為防御反撃の戦略を論ずると、正義を忘れて金と和平を唱えた売国奴の秦檜、その残党のような者どもが多く、武公のような忠臣はもはや再び世に出にくくなった。こ

のたびの朝鮮問題はどちらが正か邪か今どうして決まろうか。決められるものではない。後の世の人々は必ずどちらが清く正しかったか知るであろう。この詩は、征韓論Ⅱ遣韓論争に破れ下野した明治六年十月に詠んだものである。明治維新は、欧米列強からの植民地支配との必死の戦いであった。

そもそも征韓論Ⅱ遣韓論とは、どのようなものであったのか、他の文献を引用して説明させていただきます。幕末にも欧米列強に対抗する外交政略として、吉田松陰・橋本佐内・勝海舟らによつて征韓論が出張され、木戸孝允も中央権力を強化させる施策として征韓の実行を唱えた。明治政府は一八六八年(明治元年)十二月、対馬藩主宗氏をして王政復古を朝鮮に通告させ、中絶していた旧交を復そうとしたが、朝鮮側は書契の形式が旧例に反するという理由で拒んだ。ついで、外務省の佐多

白茅・森山茂・花房義質らが交渉に赴いたが解決しなかった。これは当然国王李熙の父大院君が国政の実権を握り、排外鎖国政策をとっていたからであった。このような韓国の排日策が明治六年に至つて征韓論Ⅱ遣韓論という大きな政治問題となった。西郷留守政府の閣議に上程され、陸海の兵を韓国に派遣してわが居留民を保護すること、使節を派遣し韓国に直接談判させることの議案であった。この議案に対し板垣退助は出兵論を主張した。これに対して西郷隆盛は「出兵するよりも責任のある全権使節を派遣して平和的な交渉をなし、それでも韓国が聞き入れない場合は韓国を討つのもよからう」と論じ、その使節には西郷を派遣させたらと希望した。諸参議の多くは西郷の説に賛成し、八月十七日の閣議において西郷を遣韓大使とする、ただしその発表は岩倉大使らの帰朝を待つて行うこと



西郷隆盛 (1828~1877年)

にした。

ところが岩倉大使一行が九月帰朝すると、岩倉・大久保らは内地の整備が第一で外征は後にすべしとの理由で反対した。征韓派、内地派に迫られた太政大臣三条実美は煩悶のすえ病氣となった。これを幸いとした大久保らは『秘策あり』として宮廷工作を実行し、岩倉大臣に太政大臣の職務を代行させるように

した。岩倉は明治天皇に征韓論に反対する意見を奏上して勅許を得たる。ここにおいて西郷隆盛・板垣退助・後藤象二郎・江藤新平・副島種臣の五参議は岩倉に不満をもって下野した。これが明治六年政変の流れである。

『酷史去り来つて秋気清く、鷄林城畔涼を遂うて行く。須らく比すべし蘇武歳寒の操、応に擬すべし真卿身後の名。告げんと欲して言わず遺子の訓。離ると雖も忘れ難し旧朋の盟。胡天の紅葉凋零の日、遥かに拝せん雲房に霜劍の横わるを。』

酷暑が去ってしまい、さっぱりした秋のけはいが出てきて、気持ちのよい時候になったが自分はこの度大命を奉じて朝鮮の京城城のほとりへ涼しさを追うて行く事になった。何という有り難い事であろうか。いやしくも大命を奉じて行くからには、昔漢の蘇武が雪の日に守った美しい操に比すべき操を守り、唐

の顔真卿が死後にのこした芳ばしい名に似通った名を揚げねばならぬ。自分は今決死の覚悟をしているので、子供等に教訓を残して置きたいと思うがあえて言わず、旧友達に離れて再び会う事ができなくなっても、以前に交した忠誠の盟は決して忘れることではない。

やがていよいよ秋も深まり、北国朝鮮の紅葉が凋みおちるころには、自分は殺されるか自刃するかして問罪の皇軍が派遣される事になり、九重の雪深きあたりに、近衛兵の銃先に霜と光る銃剣が林の如く連なり立っている壯観を、草葉の蔭からはるかに拝む事であろう。

この詩は、一旦は全権使節として閣議決定された時の感慨を詠んだものである。決死の覚悟で大院君と交渉し両国の善隣友好を成し遂げ列強の植民地支配を打破するための壮大な構想を西郷隆盛自身の文明論から推論できる。すなわち文明とは、道義の普く行われる

を称賛せる言にして、実に文明ならば、未開の国に対しなば、慈愛を本とし、懇々説諭して開明に導く可きに、左は無くして未開蒙昧の国に対する程むごく残忍の事をいたし、己を利するは野蛮じやと。

『御仏の浄光明がとこしえに』

護るならまし南洲の夢』

与謝野晶子が、昭和四年に鉄幹とともに、西郷隆盛の墓前で詠んだものである。南洲の夢とは、道義の普ねく行われる東亜の和平であったと考えられる。この征韓論Ⅱ遣韓論は明治維新新政府の外交方針に対する国論を二分する大問題であった。西郷隆盛下野後の政府は明治七年台征討を決定し、同八年朝鮮西海岸において、軍艦雲揚が江華島守備兵と交戦する江華島事件を起こす。同九年『日朝修好条規』を締結する。この後、日清、日露戦争をへて、列強の植民地帝国主義という時代

の潮流に漕ぎ出す端緒を結果として開いた『明治六年の政変』であった。

列強のアジア侵略の端緒は、スペイン人マゼランが、一五二一年に太平洋を西に進み、ミンダナオ島の東岸に到着した事であった。その後スリガリ海峡に停泊し、上陸した小高い丘に祭壇を設けて十字架を立て、スペイン領であることを宣言した。おりしも大航海時代とあいまって、列強のアジア・アフリカの植民地争奪のはじまりであった。

一五五七年ポルトガルがマカオを略奪。一五七一年スペインがフィリッピンを統治。スペインのフィリピン統治は三百二十年余り続いた。一五八一年オランダがスペインから独立。一五九六年オランダ第一回アジア遠征隊がジャワに到着。イギリスがアジア侵略をはじめたのは、コロンブスのアメリカ大陸発見以来、広大な新植民地を経営して富強を誇つ

ていたスペインに挑戦し、これを屈服させてからである。当時、イギリスと並んでアジア・太平洋に侵入してきたのはオランダだった。

イギリスが東インド会社を組織したのは一五九九年であり、オランダが東インド会社を組織したのは一六〇二年である。一七七〇年オーストラリア、ニュージーランドを手中にし、一八一九年シンガポールを奪取し、香港を奪い、マレー、北ボルネオ、太平洋に広大な植民地を獲得した。さらに、中国では、アヘン戦争以来、アロー号事件、太平天国の乱などによって大きな利権を手に入れた。その後、イギリスの中国における利権をおびやかす国が次第に多くなってきた。フランス、ロシア、アメリカ、ドイツなどである。このような国際情勢の中、一八五三年(嘉永六年)ペリーが四隻の艦隊を率いて浦賀に入港し幕府に開港を求めた。軍艦サスケハナ号に乗ったペリー



吉田松陰 (1830~1859年)

国の干渉を拒絶して独立を守ったことに、後々の日本人たちは、その事に誇りを持ち先人に感謝しなければならぬと思う。過去、マゼランがフィリピン統治以来、およそ四百数十年ものあいだアジ

率いる四隻の艦隊が浦賀に入港したのは九月三日だった。アメリカ艦隊の威力を示して条約を締結しようとする目的であり、その態度は強硬で高圧的であったといわれている。

『黒船たった四はいで夜も眠れず』

幕末動乱のはじまりである。

『かくなればかくなるものと』

知りながらやむにやまれぬ大和魂』

国禁を侵し必死の嘆願もペリーには、その思

いは届かず板橋戸塚原の刑場にさらされた安政の大獄。松下村塾の弟子たちにその意志は受け継がれ明治維新を成し遂げた。

『身はたとえ武蔵野野辺に』

くちるとも留めおかまし大和魂』

一八六七年(慶応三年)大政奉還。一八六八年(明治元年)明治維新成る。ペリー来航以来、

明治維新までの十五年もの間、尊王攘夷、

公武合体など国内は大いに騒乱すれども、外

ア・アフリカで唯一独立を守ったのが日本だからである(註、タイ国は巧みに中立を守った)。

今、何故、後世必ず清を知らむ。西郷隆盛亡き後、朝鮮問題の真の目的、アジアの民族自決の理想を理解しようとはせず、日露戦争以後、東南アジアの植民地化に加担する結果となった。

そして、今、中国共産党政権は偉大なる中華帝国の復権を求めて、アジアを世界を席卷しようとして、軍事大国の道を邁進している。二〇二一年十月十日、米インド太平洋軍のフリップ・デービトソン司令官は九日、上院軍事委員会の公聴会で、今後六年以内に中国が台湾を進攻する可能性があると証言した。中国の軍事研究集団が「日本が台湾有事に軍事介入すれば、中国はただちに核攻撃を日本に加えるべきだ」と「新戦略を打ち出している。

『台湾有事は日本の有事』故安倍元総理の警鐘そのものである。

中国の軍事行動に詳しいトシ・ヨシハラ氏は「中国政府は明らかにこの種の対外憎悪の民族感情を煽っている。とくに日本への敵意や憎悪は政策形成層にも強い。その間違った世界観が中国政府に実際の戦略を大きく錯誤させる危険を日米同盟は認識すべきだ」と警告している。

中国に新華社通信傘下の『参考消息』という国際情報専門の新聞がある。習近平国家主席が新興五カ国首脳会議で『重要講話』を行ったことを伝えている。その内容は世界経済や国際政治のしかるべき未来像を提示した上で、全人類の未来の方向性を示したものである。偉大なる中華帝国を復興し、自らが皇帝として君臨するという壮大な野望の実現である。十九世紀における列強の植民地支配に

対する怨念すら感じさせるものがある。

尖閣列島も当時の国際法(先占の法理)にもとづき明治政府が日本の領土として編入したものであり、国際社会もそれを認めて今日に至っている。勿論、当時の中国においても何らの異論や批判をしていない。もともと中国からして尖閣列島などというものは蛮族の棲む化外の地で何ら齒牙にもかけないものであった。それが国連の経済委員会が尖閣列島周辺の海底油田の調査により膨大な埋蔵量が確認されたことにより、にわかには領土の領有権を主張したものである。

南シナ海の不法占拠も同様の手口で領有を主張し、サンゴ環礁を勝手に埋め立て、国際司法裁判所の判決を単なる紙切れとして、フィリピンの主張を無視し軍事拠点化を進めている。韓国の竹島の不法占拠、ロシアの北方領土の不法占拠。西郷隆盛が当時恐れてい

たものがロシアの南下であったといわれている。北海道の屯田兵の開拓もロシアに対する防衛線としての位置付けであった。

アメリカは日本の日露戦争勝利のときから、日本を仮想敵国として、その戦いの準備をしてきたといわれている(オレンジ計画)。大東亜戦争敗戦により、東京裁判(極東国際軍事裁判)により、戦争犯罪者として、軍人はもとより、文官や民間人も被告人として裁いた。この裁判は勝者による報復であるとして、インド代表のラーダービノード・パール判事が正面から反対した。『平和に対する罪』『人道に対する罪』が事後法(連合国に都合の良い後付けの法律)。裁くものの手は汚れていないかとして、戦争裁判そのものが無効であると主張した。すなわち、日本の戦争指導者が人道に対する罪であるというのであれば、広島・長崎の人々への原爆投下はどう説明する



のか、列強の四百数十年の植民地支配は何ら罪は無いというのか、そのことをパール判事は問うたのであるが、その主張は全く無視されGHQ(連合国軍総司令部)のシナリオどおりの判決が下された。

その後、マッカーサーは外交軍事委員会で証言し「日本の戦争は自衛の戦争であった」と。われわれ日本人はこの発言の意味を今こそ考えるべきではないのか、西郷隆盛が城山で自刃し、大東亜戦争敗戦までの分水嶺が明治十年の政変であったといえる。そして、七十余年後、ロシアのウクライナ侵略、中国の台湾進攻の危機、北朝鮮の核兵器開発による周辺国への恫喝、ロシアの北海道周辺の軍事演習。戦後、日本が望まない国際情勢が急激に変化している。そして、この国々は核兵器を所有する独裁国家であるという現実。憲法九条があるから戦争は起こらない。われわれ日本人

が鉄砲を持って外国に戦争を仕掛けるなどと、誰ひとり考えていない。

しかし、好むと好まざるとに拘わらず外から戦争がやって来たらどうするのか、先日、ある会合のパネラーとして参加しました。冒頭、『九条を抱きしめたい』という映画の上映。プロパガンダそのものであったが、九条を抱きしめて欲しいのは、寧ろロシアであり、中国であり、北朝鮮であるべきだと。

自分の身を守るといふ事は理屈では無い人間の持つ当然の本能である。二百七十余年、太平の夢を覚醒したペリー来港。戦後七十年の平和を謳歌した時代が脆くも崩れさるような重大な岐路に立たされているようである。外交交渉は勿論の事、徹底した防衛体制を築くと同時に「自分の国は自分が守り抜く」当たり前の事にあらためて思いをいたすべきである。日米同盟があるからといって安心はで

きない。日本人自身が命かけて自国を守らないのに、どうしてアメリカの母親たちが自分の息子たちをよその国の戦争に駆り立てるのでしょうか。立場を変えて見れば自明のことである。

『独立の気力なきものを国を思うこと』

『深切ならずや』福沢諭吉翁の箴言。

「正道を踏み国を以て斃るるの精神無くば、外国交際は全かる可からず。彼の強大に委縮し、円滑を主として、曲げて彼の意に順従する時は、軽侮を招き、好親却って破れ、終に彼の制を受けるに至らん」談国事に及びし時、慨然として申されけるは、国の凌辱せらるるに当たりては、縦令国を以て斃る共、正道を践み、義を尽くすは政府の本務也、然るに平日金穀理財の事を議するを聞けば、如何なる英雄豪傑かと見ゆれ共、血の出る事に臨めば、頭を一処に集め、唯目前の苟安を謀

るのみ、戦いの一字を恐れ、政府の本務を墜しなば、商法支配所と申すにて更に政府に非ざる。」南洲遺訓より。

自由で開かれたインド太平洋構想の実現とアジア版NATOの構築をいそぐべきかと。

南洲の夢遥かなり。

東・南シナ海波高し!!!

(天台宗大雄山 南泉院住職)

